

## 日本の歴史 38

### 『ヨーロッパに消えた サムライたち』

太田尚樹著 (筑摩書房 ちくま文庫 2007)

本書の請求記号 210.52〓0ta

稲垣 宏行

本書によれば、スペイン（イスパニア）南部の町コリア・デル・リオ近隣には、「ハボン（スペイン語で日本の意味）」という苗字を持つ602名の人々がおり、しかも彼らは、自分たちが仙台藩士・支倉常長率いる「慶長遣欧使節団」の「末裔」だと信じていると言います。その理由は500年以上前の日本の情勢にあります。仙台藩主・伊達政宗は当時日本を支配していた徳川幕府に対抗する勢力を国外に求めていたのです。そのために自藩とスペインとの通商締結を望みました。

慶長18（1613）年、政宗の命によりスペインへ派遣された支倉以下26名の使節団は手厚く歓待されました。スペインにも日本でキリスト教を広めたいという目的、そして欧米諸国で「黄金の島」として知られていた日本との通商という狙いがあったからです。ともあれ双方の利害が一致していたこともあって、支倉らはスペイン国王フェリペ3世だけではなく、法王パウロ5世とも謁見を果たしました。

使節団はスペインに至る際、太平洋と大西洋を横断しています。これは、日本人として初めてのことです。また、支倉にはスペイン国王の前で堂々と演説をしたという話もあります。ただ、彼自身はスペイン語を殆ど話せなかったようです。それでも演説が出来たのは通訳として同行したスペイン人神父フライ・ルイス・ソテロのお陰だったと言います。本書でも大きな存在感を持つソテロ。ただ、彼は支倉とは対照的に人徳に乏しかったようです。やはりここまでこぎ着けたのは、支倉自身の力によるところも大きかったのかもしれませんが。

しかし、次第に日本で進行するキリスト教弾圧、そして宣教師らの調査の結果、日本が「黄金の島」では無いと見なされたことから支倉らは途端に冷遇され、結局、成果を得られぬまま帰国を余儀なくされました。しかも、帰国してもスペインでの活動内容すら封殺されてしまいました。支倉がス

ペインでキリスト教の洗礼を受けていたため、そのことが幕府に咎められると政宗が恐れたためです。ただ、そこには支倉ら家臣たちを守りたいという思いもあったようです。彼らの活動が明らかにされたのは、明治6（1873）年、岩倉具視が欧米視察でイタリアを訪れ、支倉の署名が入った文書を目にしてからでした。

本国とスペイン、両国の政治的思惑に長らく翻弄されてきた支倉とその使節団の者たち。徳川幕府もスペインとの通商締結を試みる仙台藩を危険視し、またスペインから銀の製錬技術を手に入れるため、使節団にスパイを送り込んだと本書は述べています。加えて日本では前述のようにキリスト教弾圧が行われていました。真実を守ることの困難さが本書を通じて感じられます。

しかし、その足跡はコリア・デル・リオに支倉の銅像と共に残りました。スペインに造詣深い著者は現地調査の結果、使節団の内、約8名がスペインの風土に惹かれたこと、日本でキリスト教弾圧が激しいことを理由に、スペインに留まったことを明らかにしています。そして著者は、コリア・デル・リオの稲作手法が日本のそれと似通っていること、生まれた子どもにも蒙古斑があることなどから、この町の「ハボン」姓の人々が、現地に残った使節団の「末裔」である可能性を強く主張しています。

彼らの業績は今、本書も含めた多くの形で我々の前に示されています。ただし、幕府への発覚を恐れて秘匿された可能性のある資料も少なくないと著者は述べています。それでも、真実を追究しようとする姿勢がある限り、いつかその全貌は明らかにされることでしょう。支倉と使節団に関するさらなる発見が待たれます。

いながき ひろゆき（司書・情報サービス課）